

年間第二十主日

イザヤ 56・1、6-7 / ローマ 11・13-15、29-32 / マタイ 15・21-28

今日の福音は、イエス様とカナンの女性についての、よく知られた物語です。しかし同時に、私たちを少し戸惑わせる箇所でもあります。

カナンの女性は、娘を癒やしていただくためにイエス様のもとに来て、「主よ、どうかお助けください」と願います。しかし最初、イエス様は何もお答えになりませんでした。

想像してみてください。もし私たちが誰かに助けを求めたとき、その人が何も答えず、黙ったままだったら、私たちはどのように感じるでしょうか。

イエス様は何もお答えになりませんでした、彼女はあきらめません。

そして、女性を追い払うようにと弟子たちから願われたイエス様が、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない」と言われても、彼女は願い続けます。さらに、「子供たちのパンを取って、小犬にやってはいけない」と言われたときも、彼女は立ち去ろうとはせず「主よ、もっともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」と答えます。

この信仰を見て、イエス様は言われます。

「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。」

では、なぜこの福音箇所は、私たちを少し戸惑わせるのでしょうか。

イエス様は罪のない神の御子です。それなのに、この場面だけをそのまま読むと、イエス様が冷たく、この女性を拒んでいるように感じられます。しかし、ここにはイスラエルと異邦人との関係という、もっと深いテーマがあります。

イスラエルは神によって選ばれた民でした。神様はイスラエルに、律法、契約、神殿、預言者という大きな恵みを与えられました。しかし、イスラエルが選ばれたのはイスラエルだけのためではありません。すべての国々に神の恵みを伝えるためでした。

ここで、「壁と橋」という二つの言葉を考えてみたいと思います。

壁は何をするものでしょうか？

壁は、何かを区別します。壁は、何かを守ります。何が内側にあり、何が外側にあるのかを明らかにします。そして、その壁によって、その共同体が何者であるのかが守られます。

イスラエルにとって律法や神殿、信仰の伝統は、一つの「壁」のようなものでした。それによってイスラエルは、自分たちが神の民であることを忘れず、その信仰を守りました。

しかし、壁だけでは十分ではありません。どこかに橋が必要となります。壁が何かを守るのに対して、橋は外側にある何かと内側にある何かをつなぐ役割を果たします。

今日のカナンの女性は、このような壁の外側に立っていたのです。しかし彼女の信仰が、その壁を越える橋となります。そして、イエス様の憐れみも橋となりました。

こうしてイスラエルに与えられていた神の恵みが異邦人へ、そして全世界へと広がっていくのです。

ここで、私たち自身について考えてみましょう。

私たちにも「壁」が必要です。信仰、祈り、聖書、教会の伝統、そして自分がキリスト者であるという自覚です。これらは、私たちの信仰を守る大切なものです。しかし、壁だけではいけません。橋も必要です。

もし私たちが教会の内側に閉じこもってしまったら、外の世界にキリストを伝えることができません。反対に世界に受け入れられようとして、自分たちの信仰や、キリスト者としての自分自身を失ってしまったら、私たちは何を人々に伝えるのでしょうか。

だからこそ、教会には壁も必要ですが、その壁には扉が必要です。そして、その扉から外へ出て、世界に橋を架けていくのです。

私自身も、カトリックの家庭に生まれ、両親から信仰を教えてもらい、カトリック学校で学び、毎週ミサに参加してきました。その信仰の環境という「壁」があったからこそ、私は自分が何者であるかを知ることができました。

そして今度は、その信仰を他の人々と分かち合うために、橋を架ける使命があります。ですから、今日、私たちは自分自身に問いかけてみましょう。

「私は、壁だけを築いているのでしょうか。それとも、橋を架けているのでしょうか。」

私たちが自分の信仰を大切にしながら、その信仰によって人々とつながる者となることができますように。そして、私たちを通して、キリストの愛と恵みが、壁の向こう側にいる人々にも届きますように。アーメン。